

41

アトキンソン・モーリー病院の創設と発展

柳澤 波香

津田塾大学/青山学院大学

CTの臨床導入など神経科学の拠点として世界的に著名なアトキンソン・モーリー病院 (Atkinson Morley's Hospital) は、回復期の患者の療養専門病院として、1869年、ロンドン郊外のウィンブルドンに設立された。創設者アトキンソン・モーリー (1781年-1858年) は青年期に外科医を志したこともある大実業家であり、成功した事業から得た莫大な資産を医学、医療の発展に惜しみなく寄付した。

セント・ジョージ病院の医師らと親交のあったモーリーは、1830年、同病院の理事となり、回復期患者の療養の重要性を認識した。回復期患者の療養の必要性は、従来より医学誌や医学界で論じられてきたが、既存の病院内に療養専用病棟を設けることは、主としてスペース確保の問題から困難であった。モーリーは、セント・ジョージ病院での治療を終えた貧しく病める患者が回復期を過ごすことができるように、療養専門病院を創設することを決意し、遺言した。

1858年にモーリーは没し、その遺言に従って1869年、回復期患者の療養環境に相応しいと考えられたウィンブルドンに、Atkinson Morley's Convalescent Hospitalが開院した。100床のヴォランティアホスピタルで、療養病院の先駆的存在であった。モーリーの遺産は巨額であったが、遺言執行人の間の諍いやセント・ジョージ病院の介入など諸般の事情から、病院の建設費用は極力抑えられた。外観は当時流行の第二帝政様式を採用したが、建物は安普請で欠陥が目立ち、病棟やチャペルの壁や装飾の崩落、水道管の亀裂など問題が多かった。しかし、患者用のスペースは総てバリアフリーで、当時としては画期的な設計であった。また、療養中の患者の心を和ませるように、庭の整備は常に入念に行なわれ、多くの花木や果樹が植樹され、患者が鳥や小動物を愛でつつ休息できるベンチが設えられた。

開院当初95名であった年間入院患者数は年々増大し、セント・ジョージ病院で治療を受けた患者の6人に1人がここで回復期を過ごした。ヴォランティアホスピタルであったので、収入が一定せず、財政的には苦境が続いたが、富裕階級による寄付によって補われた。病院への定期的な慰問を行なうLadies' Committee (1927年設置) は、患者とスタッフの福利の向上をはかり、病室へのガスストーブや無線の設置など病院への支援を積極的に行なった。

療養専門病院から神経科学専門病院への変貌は、第二次世界大戦が契機となった。戦時中に救急病院となり、増床、手術室の設置、放射線機器の導入が行なわれた。病院の名称は、1942年、Atkinson Morley's Emergency Hospitalと変わった。また、同年には60床の脳神経外科部門が開設された。戦時中の食料増産の必要性から、病院の敷地の一部は農地に転換され、入院患者と地域住民に食料を供給した。

戦後、戦時期の任務を果たし終えたAtkinson Morley's Hospitalでは、療養病棟が閉鎖され、脳神経外科、神経内科、放射線科、精神科から成る包括的な神経科学が確立されていくこととなった。作業療法と理学療法は療養病院時代から導入されていたが、1967年にはリハビリテーションセンター棟が完成した。また1971年にはCTの世界初の臨床応用も行なわれた。アトキンソン・モーリー病院は20世紀後半を通じて名実共に神経科学の分野をリードし続けてきたが、20世紀末、英国政府による医療制度改革の一環として、セント・ジョージ病院への統合が決まった。2003年、ロンドン南部のTootingにあるセント・ジョージ病院内に、神経科学専門のAtkinson Morley's Wingが開設された。